

平成 24 年度 海外商業教育事情視察 報告

全国商業高等学校長協会 公益財団法人全国商業高等学校協会

理事長 本多 吉則（東京都立芝商業高等学校長）

公益財団法人全国商業高等学校協会主催で行われた平成 24 年度の海外商業教育事情視察は、8 月 19 日（日）から 25 日（土）に実施され、ヨーロッパの 2 つの都市、イスタンブールとヴェネチアを訪問した。

まず、イスタンブールに到着し、翌朝ヴェネチアに向かった。イスタンブールに到着した 19 日は 1 ヶ月続いたラマダンがあけたお祭り（シュケル・バイラム）であった。このお祭りは祝日であり、3 日間続くとのことであった。

ヴェネチアは文字通り「水の都」であった。夏の観光シーズン真っ盛りで、町中観光客で溢れ返っていた。港にはクルーズを楽しむ大型客船が 3 隻も横付けされていた。街中で様々な言語が飛び交っていた。特に、ロシア語・中国語が多かったようである。

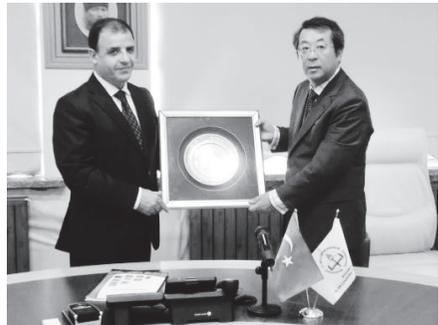
ヴェネチアでは最初に、公認会計士協会を訪問し、イタリアでの会計制度を学んだ。



（写真 1）公認会計士協会幹部（右 3 名）と

イタリアの会計制度は複雑であり、税理士制度がないため、一般の市民から企業まで税制上の申告を公認会計士に依頼している。続いて、ヴェネチアからリベルタ橋を渡り、メストレにある現地企業の経理部門を視察した。イタリアにおける企業経理はほぼ日本と同様の業務を行っていたが、就職することは非常に難しいとのことであった。イタリアの高校生は日本の高校生以上に厳しい環境で努力していることを目の当たりにした。

22 日夕刻イスタンブールに戻り、翌朝イスタンブール地区教育局を訪問した。トルコでは教育委員会制度を採っておらず、国が直接地方教育行政を行っている。従って、イスタンブール地区教育局は幼稚園から高校まで 6,000 を超える学校を統括しているとのことであった。イスタンブールには 62 の商業高校があり、76,000 人の生徒が学んでいるとのことであった。



（写真 2）文部科学省のマークの入った銀細工の皿

商業関係の高校を卒業後、大学への進学者もいるが、直ちに就職する者が多く、卒業生は企業に求められているとのことであった。職業教育に力を入れている様子が伺え、エルドワン首相の意向もあるが、ビジネスと商業関係高校との関係をより密接にしたいとの考えで、今後商業高校の比率を上げる予定をイルディズ・ムアッメル局長は話されていた。ここでは、日本からの教育視察ということで大歓迎を受け、有意義な時間を過ごすことができた。余談ではあるが、局長は私が東京の商業高校の校長であることを知ると次回のオリンピックを話題にし、ぜひイスタンブールで開催したいとの発言があった。また、親日家らしく、イスタンブールが選ばれなかったら、その時は東京でしようと語っておられた。イスタンブール開催に深い自信があるようであった。



(写真3) 局長とイスタンブール地区教育局で

イスタンブールにはランドバザールというオスマントルコ時代から続く伝統的な屋内市場があるが、近代的なショッピングセンターもいくつも存在している。その中のアクマルクトゥ・ショッピングセンターを訪れた。ここは高級住宅街の中にあり、富裕層をその購買層としている。トルコの近代化を象徴しているかのようで、世界的に有名なブランドショップが数多く出店していた。1996年には世界のベスト・ショッピングセンターに選ばれているとのことであった。さらに、最新の動向を通り入れ、改築の予定があるとのことであった。トルコ国内の購買力の旺盛さを実感させられた。

視察期間はきわめて短いものであった。しかし、当然ではあるが国内には頭では理解できていると思っていることが、実際に目の前で体験できるとは認識のレベルがまったく違ってくる。今回の視察ではヨーロッパの2都市を訪れたが、そのどちらも歴史的にはきわめて古くからの都市であるが、宗教が異なりその様相はまったく違っていた。一方はイスラム教、もう一方はキリスト教である。そこから起因する文化や習慣がまったく異なっていると言っていていいであろう。そして、われわれは日本を基盤として生活しているのである。2つの都市では宗教が人々の心のよりどころとなっている。宗教を語らないことには、文化や生活習慣は十分に理解できないであろう。しかし、われわれはグローバルな経済の中で生活しており、相手を理解しようとする姿勢が強く求められている。このことを商業を学ぶ生徒にはぜひ伝えていかなければならない。このことが達成できれば、今回の海外事情視察の過半の目標は達成できたと言えるであろう。さらに、今回参加された商業の先生方の人的ネットワークが広がればそれに勝る喜びはない。

B ファイル

—諸説あるプログラミング言語「Java」の名称の由来について—

全国商業高等学校長協会 公益財団法人全国商業高等学校協会 前理事長 森田 聖一

「Java」というアメリカ生まれのプログラミング言語がある。全商協会の情報処理検定試験においても平成25年度より出題予定であるが、なぜ、アメリカのプログラミング言語にインドネシアのジャワ島（インドネシア語でJawa、英語でJavaと表記）の名前がつけられているのだろうか？

インドネシアでは昔からジャワ島の他に、バリ島、スマトラ島などでコーヒー栽培が盛んであるが、特にジャワ島やスマトラ島で生産されるコピ・ルアク（インドネシア語Kopi Luwak）は、世界でも高価なコーヒーとして有名である。「コピ」はコーヒー、「ルアク」はマレージャコウネコという意味のインドネシア語で、マレージャコウネコに完熟したコーヒー豆を食べさせ、その糞から未消化のコーヒー豆を取り出し、洗浄、乾燥、焙煎したものがコピ・ルアクである。ルアクが食べたコーヒーの実の量の2割しか豆がとれないため希少価値があり、通常100gにつき¥5,000以上で販売されていることが多いようである。

そのコピ・ルアクを象徴とするインドネシア産のコーヒーがアメリカに輸出され、インドネシア産コーヒーが一般的になるようになり、アメリカではCoffee全般のことをJava-Coffeeと呼ぶようになった。そこで、このアメリカ生まれのプログラミング言語がCoffeeのように身近にあり、親しみのもてる、手軽な言語になって欲しいという願いを込めて「Java」という名称になったということである。

かつて私がジャワ島を訪れた際、コピ・ルアクを生産している現地の方が自信をもって同様の趣旨のお話をされていたことを思い出す今日此の頃である。



マレージャコウネコ